刀筆青紙名文貳

へ13
3573
2

守し湯治ハ殊にこゝろ慰みて只管にかよひけれバ水石もその錢あるを見て
愛して湯治ハいよ〳〵愛歡びしく娶んだやと云へども。その親の素生
せまりと躊躇程に灸平ハ賭奕に負るその債を贖ふ為に湯治に金五両を借
し手異議もなく貸されバ是をよろこびのまゝにて或ハ水石をかりて乞せ或ハ花楠をかりて
借へしけるに辭ねざその度毎にこゝろよく貸せしかバ既にはや五十金に及びぬ湯治を
豫て許りしほど今ハよき程ならんとそ是より且く水石許赴ねバ手實の期月
過ると雖て俄頃に人を遣して件の金を債ることを日にいくたびとなく灸平
これに難渋してさま〴〵にひとすら一日を延さんと欲すれども聴ざりしその返も金
あくハ水石をおくり遣せりし。あらせバ貸たる金ハさらく別に五十金を取らすべし。金もて

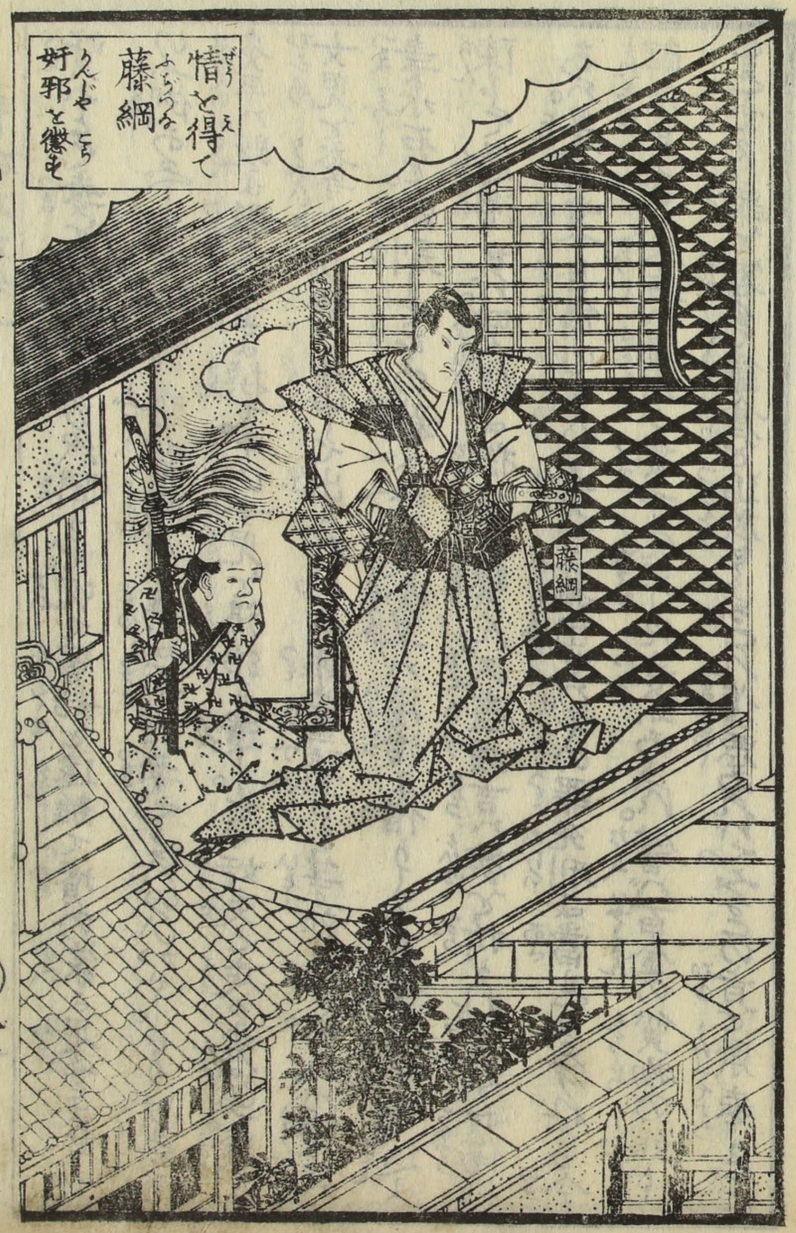
つちや

門 へ13
號 3573
巻 2

早稲田大學圖書館
昭34.6.3受
藏書

買る女房なれば。炙平夫婦ハ是ぞ為よ。男姑ことハいさび。二親共ふるぐ家へ。生涯足ぬ事べうらべ。を承引ば五十金の借財を棄捐ふ。又五十金を得ると。此彼百金の益あり。推辞ば目今速よ五十金を返さべ。両ぐ歳引ざ。官府へ訴ふ。辛きめ見せんといへり。炙平夫婦ハこれを聞て。腹たく子ども。ぢ一旦を凌ん為よ。ようづその意を任つ。迭よ手実を取かへて。五金と引替よ。水石をおく遣ろ。かくハ湯治ハ。ひのまくふ計りて水石をよびとる。ぢそ二旦ハ妻子て。寵愛挿頭の花の如く。衣裳調度櫛笄。みなその好ふ任とれども。水石ハ豫より。蘆頭吉と云ふ奸夫あり。且湯治が貨財の貨ふとて蓬くるぐ矛を娶りと。ひと朽をくこ云ふ。この日十一月中旬。蘆頭吉と謀合て夜よ紛まく潜出。

遺書を親の門へ投入て走りろ。その夜さり辻町夫。湯治ハ事の為体よ驚怒て。猛よ小厮ホを呼走。四鄰の人さへ駈催て。大騒よ追せ。その一隊の雑人們ハ鐵観音堂の辺へ。蘆頭吉と追留て。辛て打伏。聽て引ぞう来られども。水石ハ往方絶てなれぞ。の彼此と索る程よ水石ハその親炙平が奴く隠し措るよ。分明よ聞えぬ人夥遣て水石を出せとぞ。炙平ハ云ぞと陳ど。譴求ども遁与さねば湯治ハいく怒よ堪ず。遂よ件の蘆頭吉を。文注所へ引て来て云云と訴ろ。是ぞ。青砥左衛門尉藤綱奉て猛よ水石を召捕ぜ。扨湯治炙平蘆頭吉ホを。坪の内へ召聚て。その事の趣を質問つ。声を立て責も賤ども。妻を娶ふ媒妁あり。納聘よ妻少あれども。ハず借財の


情を得て
藤綱
藤綱

やさへ
ろうそく
木石
抱柳
冬平
湯治

貴ふとて。妻を娶りしの沢聞えぞ。況て湯姑を遠離て。壻の家に足ぶさもぢと
いへ例あるべーやハがれが水石ハ湯治が為に正妻とこいひかく。さりけれども
炙平ハ既に夥の金に換て。その女児を湯治に遣し。そぶ奸夫と走るに及びて途に
女児を奪去り。ぬく隠して出さぢハ。その罪蘆頭吉と等しかりのくがれば湯治ハ
妻水石を。離別してその親に返せ。又炙平ハ湯治に借りる。百金を返さぢ。送に
陳じて遅滞せば。四人倶に獄舎に繋ん。又蘆頭吉ハ腕を折れ。鼻を打傷れ
ぢハ。是自業自得の。人の妻を竊出せば。その罪死刑に當まり。ぢれども今
解示ヒまでく。水石ハ湯治が妻ぢて正妻ぢあるぢ。譬ば百金の質物の如し。
こまゝより罪を宥め。鎌倉を追放せぶる。これ舊悪あれば。みをこの旨を承奉まと

厳に捉つ。水石ハ囚を免されて。その日の聽ハ果おろかれば佐栗炙平ハ全く詐訟に負る
のゝ。ぬ曩ぶ湯治より受とり。五十金ハ。毎も賭奕に打果して。今ハ碎金一粒ども遺ぢ。
況前借の五十金と共に百金火急の調達に困ぢ果て。水石を大磯に遊女に售つ。身價八十
金を得られども。廿金に足らざれば渠が飾粧の具ハさゝ家にあるとある物ハ戸襖障屏
鍋釜ぢ。遺もなく沽却して。やゝ負に合つ。その金を返しけりされば湯治ハ今さぢ
金の返るを歓ばず。水石を離別せざるるのを惜き限りあれども既に文注所の沙汰あれば
異議なく金を受とりて去状を取るぢ。縡既に和譚ぬ。よりて事の趣を文注所へ
聞えあげて。ものく怠状をなでまつりしば湯治炙平ハ。その咎を免されて蘆頭吉ハ形の
如く。鎌倉を追もりぬ。されば又炙平夫婦ハ揺銭樹とぞりひて。水石を妓院へ售しば。

既に本銭を喪ひつ剃家具調度すべて沽却しるるるんべ。米町の住ひも得
あらべ。只是湯治が所為こと。と怨めどもとべるさん。理あり人に銭を借りて。朝ふ喫
夕ふ喫。酒をちらふ日を送る。比も十二月廿日わまり。夫婦齊一中風發りて臥る
侭に腰立どうちも累ね困窮さいよくもくせんとべるけるとびひろえつ人をかて。
湯治が宿所へ遣ていへるもり水石が奸夫と走りしに二親のもるるるべ。一旦
渠を舎藏ひしに只是親の恩愛のこと某夫婦幸あくてこの難病に嬰りしり。
あらん初の好ひに曩に返しもあとせし。百金の内五六両足らどとかりて些ばかり。
薬料をあひねりと他夏もあくもるに。湯治に一切兼引ど。こにもひけもあれ。
水石を娶りしとれども。炎平夫婦に日ごが宿に足ふことさせざりれ況仇とあり。

より。既に水石を離別しつどり復せしに本銭のこと文注所の御沙汰あるふ。その貧
足らどとにふよりあらんや。這奴何ぞの面目ありて蓬き音と出しる。絅して溷へ棄るも。
這奴と取らるる銭へなりと飽まぐふ辱めて。衝と立て奥へ入りね。その人うち腹立て。
還て云云と報しべ。炎平夫婦に恨ふ堪ず。怒充胷塞りて忽地に悶絶つ且しく
呼吸出ずれども。罵る声も漸々ふ細ア花楠にその夜身まり。炎平に死て。
物狂しくあらんその詰豆銭火箸を呑へ突立て死でり。されべこの老夫婦に。
ひとり人に泣くて。賭奕を好こ酒に耽り。老てにその女児を賣に銭と釣ること
大きなり。地方に名たる頑民なりしに鈍や湯治に討られて。夫婦倶に死ざに
よくべ。こに年来の業報なるべしられども湯治も亦その殘忍甚しく。久後いべ

あるべきと心あるものへいひけり。かくてその次の年。建長二年秋もすでに。魂祭るころふりぬ。この月の十六日。浴當が一周忌日なれども湯治はさる用意もせど。魂棚のこと人るべきよそのかたづけ修造して饗膳などハ下さびもそるべきを夜毎に燃を燈籠も油の大く費るとて。そ衆うち滅をるものを必ずも手づからつ。浴當が稱月の逮夜なれども。湯治は甲夜より燈籠の。灯を滅さんとする程に丁子頭發と飛て。左右の眼に入まりて。吐嗟と叫て桀拭ふに眼中痛こそ堪がたく。晝夜睡に就ざること既に六名三日ほど。僅に苦痛の去りしかど瞳摧け。瞼爛て遂に両眼共に聾ぬ。是よりよろづ短氣にして。奴婢を叱り罵るを又さる日ごろよりもいとうしく。ハ是のこなるべきをうくるあるぬる衆口をしうし。頻に人のこれを呼ぶとて。外面へ出んとするを。人夥推かりて。辛く禁るもあるべしとも。程に秋暮て。十月になりぬ。湯治はある日小厮を召て。貸手實を納むべし。皮籠をとりつらぬ拔き。夥の手實をひとつにして。火鉢の中へ衝入れるに。小厮はいとう驚きて。禁んとするに及ばず。數百金の貸手實。立地に烏有になりぬ。當下湯治はこれにかゝりて。件の手實のるを問に。小厮は云云と告べうちいとゞ驚きて。酸鼻にたえず覺ず。ハ汝が怠て。燒亡ふるものをあらん。舊の俗ホて出せ。出さずや。と敦圉て火箸をもて打んとす。小厮は再び驚き慌て。其孔を避ぬ。是より湯治は病重て。手實を喪ひしるべのこと惜こうち泣て。貸る金の證のけまべ誰にその金を返さべきと。家遂に衰へぬ。貧しうなるを待んとす。今とや死んと。掻捞て腹力を

半抜たりと。看病人ホ抱禁めて。奪ふてその刃を隠す。この夜ハ奴婢ホ西三人。かりくらを衛てをりしが。更闌るまゝ忍ぶも。要時食目睡む程ナリ。湯治ハ臥簟を抜出て。長押ヨ帯を投りけて。みづから経まて死ぬ。その死奴婢と。鄰ある人の夢ヨ浴當ハ帯をうち掛て。湯治ぶ頸ヨかゝりけバ。千賀右門走来て。忽地ヨ縊殺ちつ。灸平花楠ハ傷ヨをり。夫婦齊一手を指て。歓び笑ふをり。けるかくて奴婢ホハ夢覚て。駭騒げども。その甲斐なし。そのあるべきよあらぬ。天明て四鄰の人ヨ告。又里長ヨ告るどもるふ。前妻浴當が親族ハさゝ。又湯治ぶ親類も。鎌倉ホ絶てなし。只紀伊国の藤白ある。名草劇齋とゆ醫師ハ。ちゝ〜紀湯治が弟なるより。粗知まるりのあるふより。躰て乖脚を遣つ。その乖脚ハ日ぶ経へて。

藤白の里へ向て。云云と告るふ。劇齋ハその人共伯頻ヨ路次をいそぐ。十月の中浣ヨ鎌倉ホ到著して。奴婢鄰人ホヨ對面せり。ぶれ湯治が横死ぜりと。うち歎く氣色ハなくて。その遺財のる所の最ヨ穿鑿をるふ。大約七百餘両あり。又貸出しる金ハ湯治が手實を焼捨られば。定るふことを知るりのみ。劇齋奴婢ホを疑よて。文注所へ訴るべ。虚實分明なべ。と云ざるよあらねども。豫く高利の聞ヲあるヨ。愁ヨ訴て。その咎ヨあひもたべ。毛を吹て疵を求るなゝんと。云ハくして遂ヨ果さゞ。借るりのハ高利をうらみて。手實を焼きしを幸ひヨ知ぶ白しとをゝぬもるけ見バ。その損拳て数ふべからぶ。ちうれどもるの家庫あり。衣裳調度家具雑具多くり。みなことを責んそ。此彼と相譚ふ。三百餘金ヨ

買んとらんとりの。第一番の得意あんべ。その商人さ札を落して。明日受授と決めゝる。その夜丑三の比及ま。庖厨より失火して。彼衣裳調度家具雑具はさゝゝ。土庫まもゝ猛火入りて。ことべて湯治が布地の中へ。塵も遺さど焼亡されども。幸ひて延焼せど。當下劇斎へ。彼遺財七百餘両を。懐ふゝるのを。慌迷ふて走り出辛く煙を避るのゝふ。翌日必金まべき。三百餘両の沽物は果敢く灰燼まるゝ。呆まて腰を抜ぞ。悔らめどもまべもなく。兄湯治が残忍の悪報とは思ひもかけど。この夜も奴婢を疑て。彼ホハ拉の侭ゝふ些ろ金を分も與へど。身の暇をのを取せゝべ。或ハ恨を。或ハ譏まろ。事を世普く叫イ去られ。その風聞大ゝうゝべ。ゝ人竊まこのゝを。青砥藤綱ま物ゝうゝてその批評を請ゝゝべ。藤綱聞て眉を顰め。彼嶋影屋湯治ハ曩ま云云の訴まゝて。ゝんをの人とゝうをまゝまろ。渠ハ紀の藤白みる。醫師名草生の冢子ゝりゝ家督をその弟ま譲りて。京へ出又この地ま来て。猛ま富ゝるのゝゝ。ゝゝゝ利得の為ホて。呉の太伯の辞譲と異ゝ。且その家弟を更めて嶋影屋と號せハこを名詮自性ゝるべ。譬ハ嶋影の嶋を分ゝべ山鳥の影とゝる。彼湯治ハゝんとゝゝが。邪智を愛して禍を釀せゝ。方是山鶏が美ゝ羽毛をゝゝゝ愛して。水ま潮ゝを死ゝるゝ如ゝ。ゝれゝゝこそ。水石とハ遥婦ま悉潮して。計りゝ一豆要ゝりゝゝゝ。是ゝゝその家乱ゝゝれ。水石ハ則石ゝる水ゝゝ石ゝる水ハ浅も澄ゝ。湯治が慾の影をゝゝて。潮ゝのとハゝ。且湯治が残忍吝嗇ゝて家を富ゝ。

身と肥もとのゝ多しゝハ無病ふして温泉ゝ遊び飽まで淫酒を恣ゝてこれを保養と
いふが如し。その保養まあ〳〵て。みづから命を削るのゝ彼湯治ハ名草氏ゝ名草と
慰と和訓近し。所謂ゆゝさまゝ湯治もるゝの竟その益あるとゝ。亦是名詮
自性まあ〳〵ゝ。又彼見立千賀右衛門ハその遺財を湯治ゝ與へて。盲目ゝ婦女
浴當とゝふんゝ妻せしハ渠も亦利ゝのゝさゝ同氣相求るのゝ既ゝ湯治が
残忍の毒ある衆まゝ〳〵て。後のる衆任用せゝ〳〵。浴當ハ竟ゝ憤死せり。まゝ
醫師が病を療治もるとて。その病症を診錯て還て人を殺ゝ似ゝ。これを
ゝんゝそちがへとゝふ所謂見立千賀右衛門ハ亦是名詮自性ゝ。又湯當ハ。
湯中ゝ浴も湯も。和訓もて。當も中も。あゝると訓り。彼聾女ハ慤ゝ湯治を聳ゝ

ゝ。可惜命を縮めゝ。譬ハ虚症の病人がその病症を知ゝ〳〵ゝ。
漫ゝ湯治もるとゝ死ハ。硫黄ゝ蒸て眼を損し。且津液を涸し。血を耗て。ゝく程も
ゝく死もるゝ如し。又彼佐栗灸平ハ何とゝふ活業ゝ。只その女兒ゝ淫を賣して。
これを恥とせざりしゝのゝこゝハ養生もせゝ。餌藥も用ひゝ。いろんや又その關所も
ゝふゝゝして。捜灸もるゝ如し。熱痛を忍べゝもその益ゝ。恥を恥とせゝれゝ人ゝ
あゝゝ。渠が死ゝまのゝ為ゝ作せし薬ゝ。捜灸して死もるゝのゝと。又何ぞ
異ゝべき。又その妻花楠ハ夫とも僻ゝして。女兒を浮氣ゝ生育。これ如ゝく
老楽ゝ過ゝんとゝふ所謂ゝのゝこゝハその小兒をゝもせゝとて毎ゝ甘き果子を食して。病乃
發ゝを志ゝぬが如し。俗ゝその果子を鼻藥とゝふ。ゝ藥ゝあゝ〳〵て。その子ゝ毒を與る

あり。花柿と鼻藥と。此彼和訓相近し。かれば佐栗炙平と又その妻花柿とこれも名詮自性なるべ。又蘆頭吉八無用の遊民遂まで人の妻と竊とてその鼻を打殺まで果へ追放せられさり。大凡藥種の頭尾へ用るまで足ざれば。製藥のとき必棄こまを名つけて蘆頭といふ。渠へ無用の遊民と既ふして面部を毀られ鎌倉を追まる。廢物まあり〜てるの。亦是名詮自性まあるべや。奸邪貪婪淫奔穢行。皆その頑愚の慾火おりて。或へ横死し。或へ放るゝと憐べ。おまとむべ。湯治が孱劇齋も亦悭貪なるものふこそ。渠天命とおそれざして。覆車の轍を續こ而べ又その兄のごくあ〜ん。と潛やふ批評して只顧ままを嗟嘆さり。博く愛して私なるこまを仁者の心なるべ。

第二套　藤白の春庭　洛陽の僑居

却説名草劇齋へ兄湯治が遺財七百餘金を一毫も散さゞと必へ里人まま別を吾ど。逃るゞごとく鎌倉を未明まを起て路次をいそぐ。その年へ天和暮んとする比紀の藤白の里まを還るつ。長途の疲労を物ともせゞ。掃出を媒と共ま。年来の窮鬼を禳ふて。俄頃まを富饒まあり。なまとも亡兄の追薦まを。佛事まを。どよりもせゞ。さんべ鎌倉まを旅宿せ日湯治が死ざるの怪しかりしへ前妻冷當が祟いて。炙平夫婦が怨もあるん。今その遺財些捨て施餓鬼して靈を鎮めつへと勸るるのあり。まゝ劇齋へ冷笑ふて。嫂浴當が菩提を吊へゞ。況炙平夫婦が横死を憐むてろありけり。抑劇齋が人とあり。刻薄ふして粹を好。吝嗇ふして尊大あり。書を讀むと云好ゝろべ。醫術儒學ふ暗かゝゞ。田舍まを稀なる博物とて。ものも知らぬも

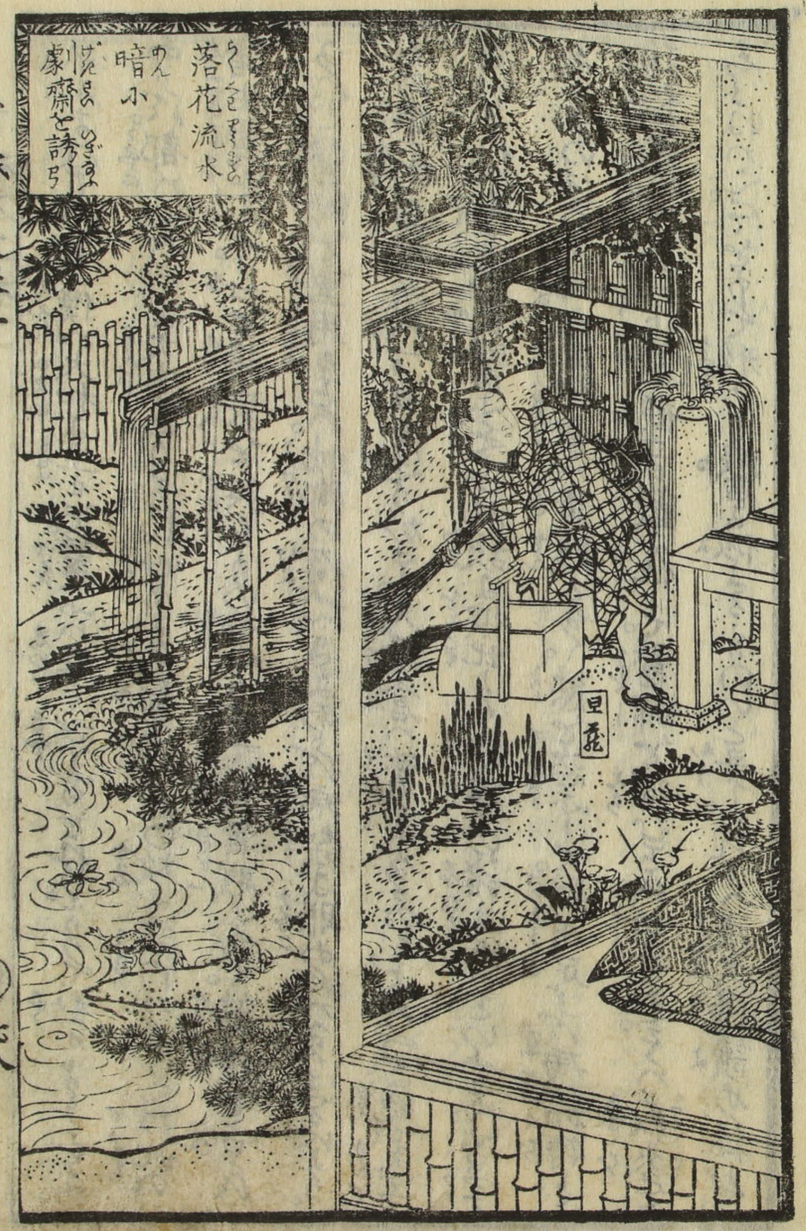
憚まべみづからその學問を鼻に被て俗を直下し。動もすれば古書を引き醫論を
好みて近郷の老醫にまさるを開き出でゝ常に人の非をいふを樂みとす。癖
なれども利の爲めに己を枉て勢に就ざるまゝ。只是詞章記誦の學にく。
聖人の大道を學び得さるにあらざれば。智術に躭りて。訟獄を事とし。行狀に
薄くして。衒を飾ることにかゝるべし。やとやくとり。儒醫をもて名を知ら
ゝ物なら。尚その技に行はるゝ。いと朽をしくもひさるに今かう俄頃に徳
にさきく。その家豊まさるべし。弟子若黨とらんりの二人と。奴婢一両人を使ひ。
かゝる物を整ひて。事足るとも見えるべし。齢三十にあまれども。いまだ妻を
のゝ娶らねば。そゞろに幾人か媒妁するもあれども。一切これを承引せず。

強く勸るものあれば。劇齋頭をうち掉て。妻子は世路の鉄なり。人として
青雲の志なくんや。いまゞ風志を得遂ずして。子どもさへいで来るべ。
窮鬼を招くこと。然でもかゝる田舍にて。こゝろに稱ふ婦女子なし。今とて爲ぐ
こゝろへと。涕を掩ひ辞しけるに。媒妁ホ稍猜しそこの人。今は豊なれども。女房に
のゝ事を缺くは兄がうくに。懲けんとて。ホ後は云云と勸るものあるに
けるかくて。五年ばかり歴る程に。建長も六年にありぬ。されども劇齋が。
醫術は竟に行まゞ。年来こゝを憤りて。一日又ゆくゆくて。ある田舍に。
業主をのゝ宝として。沙中なる黄金を知らゞ。どうぞ死を起し生を衛る療治に
神あるのゝなるべ。經済も亦國を醫する。這妙手段あるべ。名は一郷の

外を出ざいと恨むべ〜〜らむべ〜。とひとりごちつゝ端居とゝれば。頃ハ
季春上浣青葱がちなる庭面ハ紫匂ふ壺菫杉菜すゞなを咲出て
うらゝくとたゝ陽炎ハ遣水もなゝ温ゝ初けん。處得貝あれ蛙二ツ三ツ。
微音ふ鳴さるさへいと趣ある眺ありかゝる折軒端ハ近き竟の水より。
一葩の桃花纖々と流ハ来て居る桶を溢まゝる。水のまゝく曲演ハ
流ハ入りつ彼此とゝとも奇〜〜漂ふ光景。但見る武陵ハ世を避ハ来て。
秦人の隱宅ありぶ〜曲水ハ友を聚へ〜。蘭亭の下流ハ似たり。劇齋ハ
はゝゞくと丸つ再びやゝ冷ゆ。水ハ漂ふ彼落花ハ垣の内なる物ありぶ。遠き
山路ハ咲る牧近き山脚ハ散る牧拂へ定らなゝねども。誘ふ水ハ任ぜ〜ハ。

いゝふ〜てたゞゞくとゝの曲演ハ入るゝ〜あゝんかくて又この堰堤を越ゆ。
流々て後竟ハ。江あも入り。海あも入るべ〜。さゝ〜とその幹木ハ。動ゞ安ハ
似たれども。絶ハ石滸ハ根を潤〜く。よゝふ滄海のあるゝ得たゞ空〜く
溪邊ハ朽んのゝ。ゝらんあハ三千年の春秋ハ値ハとても。亦是何乃益
やハあるゝ。そハ只落花のゝなゝゞ。人も亦如此なるべ〜。ゝの足引の山腹ハ。
生涯を送まるゝのゝ。書を續ゝとの五車ハ過て。その才二酉を貫ゝ〜も。
世ハ名を知らゝゝゝゝ。終ハ亦埋木と。なりも果るゝ丈ハ生ゝて〜
甲斐ハあゝゞゞ。陽陽ハ流ゝ水より急かり。今ゝの落花流水を鄉導ゝ
ゝゝゝ起ゞハ。老て後悔ゝるゝとあゝん。ゝれゝゝ京ゝれ鎌倉ゝれ都會ハ

出て醫療を施し。名を揚家を興さんと欲ぶ。豈快き事ならずや。上醫は國を醫し。その次は人を醫し。又その次は病を醫す。繞は五人七人の脆を握りて口を餬ふ。それをも醫師といふ。今更ならべいらと愧べし。曩に京師東行して。華洛の風流より。鎌倉の富饒なる。初て目擊せり。日ごろ。壤臭き田舍の住ひと。鬱悒ばざるまゝなど。累世の居を移して。他所へ赴くは大事なり。且その雜費の夛かるを。厭ひ。いかゝなる。貨財は都會に輻湊し。人物も亦都會に在り。況ん。匙。長沙越人に讓らべくも。いねば。伎を世の億萬人に施んと欲するものの村落で何をとるべき。名利兩全の謀は。只ゝ去るにあり。吁然ありと。肚裏に計較大々決りつ。漫に獨笑して。妻子に。そかる時。情逸け且。とゝの。鄕の親類外戚のなれかもわぶざめんと。劇齋は兄とゝ。中ごろかりしのあれば。のれ富饒にあらずとて。この藤白の里に處る。氏族なるも貪ぼり忌嫌ふてよせつけど。又人なみに世渡るとも。俗物なりとて侮りければ。食その傲慢なるを。憎みて胡越のごとくをのせり。かれば又今更に。誰とて相譚ふものもなし。只彼弟子の如く。小廝のごとくこの三年隨從せる。熊野豆藏。佐東蜜八といふ兩僕ありけり。この夜さり。先蜜八を召近つけて。云云と意中を示し。今他鄕に移らんに。京に住ひく。佳らん。欲鎌倉に赴くべき。汝且試に。いづれにしても札を入れよ。といへば。蜜八うち含笑そは殊更にあるべき。もん討ひとそゝいへ。今の世の人いみな。鎌倉を世ごとるふ。ひとりれ。といふめんど。商人などはもあん。醫師は


落花流水
暗小
劇齋を誘引
旦那

げ紀敏

京にまゐりのぼる。僕は大和に生まれ。曩には旦く京にとどまりて勧めもとめ
あらば。都へよろづの文字あり。されば世々に名醫出づ。この故に畿内はさらなり彼此の
諸生留学して名を揚家を興すもの多くり。且京は貴賤とのく節儉を旨とし
なれど。醫師を重用るとは。他郷の及べきにあらず。病架に眼あれば多くり。さるにより。
その學術あるものは一夕日も送りかねて。又鎌倉は繁華なるのゆゑにつねづね絶て文字
なし。されば學識良醫ふえ。この故に彼此より。游學の諸生ありといふとも。苦學
なるものは少く稀也且鎌倉は貴賤とのく。慾を恣にして財用足らず病は加持と
祈禱を先とし。或は笠観音籤に任して。醫師を擇むを要せず。そは叔麥を
もつはらとして形のごとく醫に似るものいと多し。これらは漢文得讀め稀也。

國字の方書を秘藏して。香附子は附子にして。香ひあるものとなる得鶴虱は鶴乃
羽虱。麒麟血は麒麟の血なりと思ひ。醫師でも人なきに世を渡るは繁華の
餘澤なるべけれども。これを知らねば愧る色なし。さのみの權助頭巾を冠めて。權菅丞と
改めいる。これを名づけて傳盲醫といふ。原是低弱不虞のものの或は活業に
疎きものの親同胞をたらうてあきて。醫者にでもなれといふ。さらでもこれなる醫者は
でもあらんとそなれるこれが病架も彼此に藥礼を不沙汰にして。召ども誰の来ぬ
とこれは權菅丞でもかれといふ。自他ともに傳盲醫と
いふ。鎌倉は毎町に醫師は軒を比べて。のべ病架を羅ねて。二分礼を
上々の得意とするものゆゑ。權を病架に執られつ。喫倒られても懲ずまふ。

一人ありしも乞薬奴の妻さえ面目よせざるべし。斯彫ある醫者なれば。病架ハ物と物とも思へど。是首の薬礼を不沙汰して亦復彼首を倒しても。後日ハ物を欲もあべし。謝物ハ一貼何分と勘定もするハ上得意無勘定よりてハ一貼絶て一分欲五釐ハ當るべ。その劑を賣るとゝろ薬料足ぶ。よりや醫師ハ仁術でも本銭ハ没てハさるべ。の煩悩も起るべ。又大病よりてハ甲乙匙を投ぜを。ゝゝから中ゝ治しても。薬料の外謝義もなし。病痾ハ愈て後ハ。薬礼ハよりも多く取るべ如く惜とゝ人とゝろとゝとゝろ。書出を遣るべくもあらねば。年中三百六十日。薬種屋の為奉走して歯を切る醫師の宿恨ひくて遂ハ亦匙ハ非命ハ終もあらんと思へば世間ハ病痾で死ぬハ幸ひと匙りて命を縮られんハ。

いと痛しるるなれども。もゝ孫べ驚くものもなり。夫良薬ハ口ハ苦く。良醫ハ世辞をいふるなり。匙りて齢を延されんハ寔ハこゝろ恩なれども。もゝねべ賞るものもなり。貴き薬種を用ふても。薬礼疎畧不相當。甚ハ至りてハ。喫倒しても恥とせず。盛殺されても怨もせず。命の相場ハ廉けれバ。醫師ハ苦学するの。漸そ稀ハ多くもの。ものづかゝる勢ひなれバ。されバとて彼地ハ。學識良醫なれなれど。さる人ハ行まゝ。ロノ療治のゝ上手ハ。病架ハ媚るが下手なる故。鎌倉の光景ハ僕いまゝ。ゝもせれど。風聞もべてかゝの如。君ゝもせるハけめ。この両人をもゝ。いづれとも。みづから擇まるハ。ゝ後悔りやいんと。利ハさゝゝも論どれべ。劇齋もべゝ領さん。汝が議論ハ。意を稱へり。鎌倉ハ由縁の地なれど。これ聊忌ゝあり。

現京こそとうこめんと応て蜜八を退せ又旦藏を召よ〳〵て。説示をエ初の如く。亦試よ
意見を問べ。旦藏聞て眉うち顰め。かゝる大事を僕なごぞ。論ふべくもあらねど。問まて
答まうさゞ〻ハ忠心の足よ似ゝ〻ん欲君今衣食よ物足あゞ〻。飽ぞ名利を求ん
とそ。父母の墳墓よ遠離ま京鎌倉よ赴きあゞ〻。そ汝子孫長久の良策とハいひ
かゝ〻ん。利を射ゝエハ都會よあり。名を釣るも亦都會ふあれど。鄙語かの一夜
撿校。その衰るふ及びてハ子孫よ乞食ゝるもあり。大約都會の人情ハ奢侵よ
狎て冥理をわきまへず。貨悖て入ると死ハ悖て出る自然の勢ひ。積善の家あ〻
ざれバ。子孫繁昌ゝるエの罕なることま由まり。田舎ハ名利の街衢よあらねば。
慾寡くて俗厚く。良賤おのく田園あり。よゝづよ不自由ゝる故よ。富ども奢侵よゝ

おゝくその富を失ハど。貧きものハ貧き隨よ送よ資て遺跡を立まバ。子孫の長久
ことよよれり。今君が才をりて。よゝや京まれ鎌倉まれ。大都會よ出あゞ〻。名利ハ
得ゝ〻べけまども。子孫の為いゝ〻ぐあるべき。僕ハそろ得ゝ〻ぐ。ろゝくて游学ゝ〻
とも。故郷へ還りゝ〻べき。比すゝ〻ありていふぞや。先祖相傳の田園を遠離。住熟
ゝるひゝ家宅を捨て。他郷へ移りゝ〻んとハ。物体ゝくこそゝるひゝへ。僕ゝ君が
舎兄ゝる。湯治ぬゝと識らねども。彼人の鎌倉まそ。富千金を積ゝるひゝもゝその勢
一期を終ごゝて。迹ゝくゝ〻せゝるひゝまゝあゞ〻ぞや。前車の覆るをゝて。そゝれどハ。
何をりて来軫と整言べき。只是釋迦よ法問とゝる。沙彌が口つゝよ似て。烏滸
ゝるべゝ。いと憚よゝべども。そゝてゝハどハ不忠ゝるゝん。智者ゝも千慮の一失あり。

再三賢慮をめぐらしたまへ。後悔あらんか。願ハくハこゝをひへと正首を諫まべ。劇齋こを聞果て眼を瞪らし声をうち立さんとするのあまれまゝざるんや。大都會の地ハ。富一世あて。子孫繁昌せぬりのあらべ。京鎌倉ハ人傑竭ん。汝ハ熊野の人氏なれば。この紀伊州を去ることかくばそなイよう。賢ざらて禁る狡。おのゞ田を引く水を論。さる入作を憑ねべ千萬いとも無益こ。ゝぶ心既こ決せり。ゝろ〳〵と考ぐその意こ任て。身の暇を取ぶべ〳〵。そく出ぞや。と敦圍べ。旦藏いく〳〵畏て。平伏る侭得も立ぜ。旦て頭を擡おもろこ深くもひ過て。言を慎ざりけこべ。やとろあくこゝろこ。違ひぬるこそ悔しけこ。熊野ハ故郷といへのまあて。親同胞もあれりのを。他郷へ

従ひもけべとて。誰が為こ厭ふべき。所縁こ就て當塾へ。隨身しても人あまこ食料ぞ。齋せぞ。小厮ホして使る。師あり主こ。恩義ハ高し。短才魯鈍の僕なれども。習励まて庇ふべ。醫師の負こ入るこのあらべやハと憑しく。ゝろあハ似ぞ今さらハ。出て邁とハまさみなり。ゝん為ふこそもうせしるぞ。僻言あらべ許さをあハ。京鎌倉ハあ近し。筑紫の盡外まれ。陸奥まれ。何國まぞも従ひあらん。他しあくゆ。とおるく勸解しべ。劇齋僮こ氣色を復して。迫日上京治定のあ。密ハが論せしあこ明々地こ説示つ。寔こ渠ハ世才あり。汝が為ハ。伎も兄あり。倘渠ホしも做ハぞハ。生涯發迹かるべし。と褒貶まてぞ窘めける。さる程こ劇齋ハ。上京の准備いそべし。里の親族鄰人こ。

由を告引を告田園の里人に預け家も人に住て年々の所得を定め蜜に豆蔵と
のを従て其の他一両個の奴婢ホも身の暇を取らつ器材調度に遺も
る里近き港口より海船に積のぞて主従三人上乗たるに折節順風の
けに樹々の秒も嶋々も彼より走る心地して若々霞む藤白山長き春日の
麗に釣する舟の楫とりて還るそなに淡路洲真柴の煙斜なれ
吹飯もいつ漕過て旅ちり行き三月盡その日も西に傾く比押照る
浪速の浦回る木津川の岸に着つ又淀船に乗うえつ次の日の
亭午時都三條の邊る客店に宿投て水路の疲労を慰めけり

刀筆青砥石文鳶水筬語巻之一終

97711